

ミサंगाに込めた思い

「カンボジアの子どもたちのために募金の協力をお願いします。」

「カンボジアに井戸を作るための募金に協力お願いします。」

ここは、下蒲刈町朝鮮通信使再現行列メインイベント会場。下蒲刈中学校三年生たちの声が会場に響き渡っています。みんなの募金を呼びかける声を聞きながら、和法は二か月前の終わりの会のことを思い出していました。

「次の総合的な学習の時間は、今、勉強している国際協力について、自分たちができることを考えてるんだって。」

「自分たちのできることか。何ができるだろう？」

「去年の三年生は何をやったのかなあ？」

「確か募金活動をしたわ。」

「うん。いいね。それぞれ。それに決まり！」

「募金なら簡単だね。」

と、口々にみんなが賛同し始めました。

そのとき、黙って聞いていた和法が、すっと立ち上がって言いました。

「先輩は、何のために募金をしていたのか知ってる？」

「え？そんなこと、どうでもいいじゃない。とにかく先輩に負けないようたくさん集めようよ。」

隆太が元氣よく言いました。

「お金をたくさん集めて寄付することが国際協力なのかなあ？それに、そんな考えで、みんな募金に協力してくれるのかな……。」

「そう言えば……、思い出した。先輩達は、募金をするために、文化祭で劇をやったよね。」

と、誰かが思い出したように言いました。

「劇？だめだめ、僕、人前でしゃべるのは絶対いやだからね。」

隆太の大きな声に、たくさんの人がうなずいていました。

「でも、あの劇をみて、僕は募金をしなくっちゃって思ったんだ。」

「私も……。あの劇をみるまで、カンボジアのこどもたちのことを何も知らなかった。」

「あの劇が、みんなの心に響いたからこそ募金してもらえたんじゃないのかな。」

和法の言葉に、さっきまでの学級の熱気が嘘のように、しんと静まり返ってしまいました。募金活動って本当に簡単なことなのか、ほんとうの国際協力とは何かを真剣に考え始めたようでした。

（僕たちにも何かできるはずだ。心をこめて何かが……。）

イベント会場には和法達三年生の姿がありました。
「和法。募金をして下さった方にお渡しする*ミサンガ、準備できてるわね。」

「もちろん。みんなで、土日も学校へ行って作ったものだもん。」
「そうだよ。大変だったよ。一本一本の糸を編んでいくのは。僕、あんまり器用じゃないから。」

隆太がふうつとため息をつきました。

「ミサンガへ込めた私たちの思い。伝わるといいわね。」

そのとき、会場にいられている方が、和法達の募金を呼びかける声を聞き、近付いて尋ねました。

「これは、何の募金ですか。」

「カンボジアの人たちに、安全な水を飲んでもらうために募金をしています。」

「安全な水？」

「はい、わたしたちにとって安全な水は当たり前なんですが、カンボジアでは、とても貴重で大切なものなんです。井戸がない村では、雨水を貯めて使ったり、川から水を運んできたりしています。このような不衛生な水を飲むため、カンボジアでは感染症で命を失う人が大勢いらっしゃいます。」

そのような村が現在でも多くあるそうなんです。」

「どうして、カンボジアが、そのような国になったのですか。」

「カンボジアで長く続いた内戦のため、道路や水道・電気などのライフラインや学校や図書館などの公共施設の整備が遅れています。それに、今でもいたるところに埋められたままの地雷があり、整備を遅らせているそうです。」

「いや、今日は勉強になりました。わたしも、君達のように、もっと世界のことに関心をもたないといけませんね。」

そう言いながら、男の人が募金をして立ち去ろうとした時です。隆太がすかさず、自分たちが作ったミサンガを差し出しました。

「どうして、これを？」

「はい、このミサンガには……。」

隆太が誇らしげに自分のミサンガに込めた思いを語り始めるのを、仲間達は自分のことのようにドキドキしながら見守っていました。

こうして、カンボジアに二つの井戸ができました。地域の方々の温かい支援のおかげで井戸ができたことに、和法達三年生も達成感を味わっていました。

しかし、それだけではありません。生徒たちは誰もが思っていました。

（これで、自分たちの国際協力が終わったのではない。これから、始まりだと。）



*ミサンガ・・・手芸の組みひもの一種である。刺繍糸ししゅうを何本も合わせて編み、模様を作る。手首や足首などに巻きつけて使用し、紐ひもが自然に切れたら願いごとがかなうという縁起担えんぎかつぎの意味もある。